



No. 140

ティーブレイク

## Tea Break

かげろう

夏になると蜻蛉（カゲロウ）が飛ぶ。優曇華（うどんげ）の花というのは、クサカゲロウの卵である。砂場で見られるアリジゴクは、ウスバカゲロウの幼虫である。カゲロウというのは、成虫となつてからはいずれも短命で、中には数時間しか生きないものもある。なお、あまり知られてはいないが、実は蛍も短命で、成虫になつてからは水以外は口にせず、2週間程度で寿命を終える。

都会ではあまり虫を見ない。ほとんど見かけないといつてよいだろう。カゲロウもホタルもない。そこで、子供の教育のためにも田舎に行く。

田舎に行けば虫ばかりである。最初は怖がっていた子供たちも、そのうちに慣れ、楽しんで遊ぶようになる。そしてそれは、子供らにとっては、都会では体験できない珍しい経験である。

そんな珍しい体験に疲れたのか、畳の上に父（＝私の父＝娘にとっては祖父）と寝そべると、すぐに寝てしまった。父は父で、孫に甘い爺さんぶりを発揮して、孫が寝た後でもなかなか戻ってこない。

実は、生まれたときから都会のマンションに住む子供たちにとっては、畳の間というのは、非日常の世界なのである。そこには、我々が感ずるような「ああ、懐かしいなあ」というような感慨は全く無い。逆に、自分らが子供の頃には、洋風のホテルに泊まると嬉しがったものだが、今の子供らは喜ばない。彼らにとって見れば、自分のマンションと大して変わらないコンクリートの部屋の一角に、何の珍しさも感じないのである。

「世の中も変わったものだ」と思いながら隣の畳部屋を覗いてみると、孫娘と一緒に父も寝てしまっていた。

ただ、孫娘に添い寝しながら、75歳になる老父が泣いていた。それは、あまりにも意外なことだった。その原因が全くわからなかったからである。

けれども後日、それを知るようになった。どうも父には昔、妹がいたらしいのだ。けれどもその妹は、戦時中の食糧難その他の事情により、幼い頃に亡くなってしまったという。そのときのその妹の年齢が6歳か7歳ということで、ちょうど今の自分の娘と同じくらいの年頃である。そのときの父は小学校の高学年。多感な時期でもあり、よく覚えていたのであろう。

そういえば、親戚の誰かが娘を見て、どこかで見たような懐かしい顔つきだとも言っていた。父の妹といえ、亡くなってしまっているとはいえ自分の叔母に当たるわけだから、娘とは血がつながっている。血がつながっているのだから、似ているのであろう。

そう考えてみれば、親父が私の娘を、幾人かの孫の中で特に可愛がる理由もわかるうというものだ。

戦争。僕らには体験が無いが、日本の夏がどこか暗いのは、8月に終戦記念日があるからだろう。たとえどんなに変な世の中になろうが、戦争だけはごめんである。戦中に亡くなった父の妹は、蜻蛉のように短命であった。ただその妹は、父の思い出の中だけに生きるにしても、陽炎のような幻ではない。

夕刻になり、部屋の中をカゲロウが飛び始める。畳を珍しがる自分らの子を我々が見る以上に、父の代から見れば、自分たちも相当に変わっている人種なのであろう。そんなことに起因する葛藤を経ながらも、我々は成人した。幼少のうちに亡くなってしまうことなく。

ただ、そのありがたみを感じることなどは、見慣れた日常には無い。ふと、目の前を弱弱しくカゲロウが通り過ぎる。食物を全く採らずにすぐに死んでしまうカゲロウが、戦中の食糧難で亡くなってしまった父の妹と重なる。そして自分の娘を見て思う。「世が世なら…」と。

どうやら田舎というのは、自分のためにも良かったらしい。  
(正)